

令和 5 年 5 月 5 日現在

機関番号：32518

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K20019

研究課題名（和文）全体主義的なスポーツ指導をめぐる哲学的研究

研究課題名（英文）The Philosophical Research of Totalitarian Sports Instruction

研究代表者

野上 玲子（Nogami, Reiko）

江戸川大学・社会学部・講師

研究者番号：80825224

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の主眼は、「全体主義的な指導はなぜ悪いのか」であり、スポーツの内外で起こる現代的な課題と向き合いながら、スポーツのあり方や指導方法について議論を深めてきた。なかでも、日本のスポーツ界では、選手の自主性やフェアプレーを無視し、勝利を絶対とし、選手を支配する全体主義的なスポーツ指導が蔓延しているのではないかという見解を示した。そして、ハンナ・アーレントの全体主義思考を参考に、日本のスポーツ指導における人間の「無思想性」の存在について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、スポーツ指導の現場に全体主義思考が蔓延すると、「無思想性」によって破壊的な状況が起こり得るということを明らかにしたことである。未だ日本のスポーツ界には、集団行動や連帯責任といった全体主義的な指導実態が確認されつつも、全体主義に対して規範的にアプローチする研究は乏しい。本研究は、全体主義思想がどのようなものの考え方によって支えられ、正当化され、あるいは批判されているのかという理論の形成過程を検討した上で、今後日本のスポーツ推進を視野に入れながら、全体主義的なスポーツ指導がもたらす機能と今日的課題について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The main focus of this study is "Why is totalitarian coaching bad?" We have been discussing the state of sports and coaching methods while confronting contemporary issues that occur within and outside of sports. Among other things, he expressed his view that totalitarian sports coaching, which ignores the autonomy of athletes and fair play, makes winning absolute, and controls athletes, is widespread in the Japanese sports world. Then, referring to Hannah Arendt's totalitarian thinking, he clarified the existence of human "thoughtlessness" in Japanese sports coaching.

研究分野：スポーツ哲学

キーワード：スポーツ 全体主義 ハンナ・アーレント 思考停止

1 . 研究開始当初の背景

(1) 2018 年 5 月に大学間によるアメリカンフットボールの対抗試合で、指導者が選手に危険な反則行為を実行するよう指示するという状況が起こり大きな騒動となった。暴力や体罰根絶を目指し、民主的な指導が期待される一方で、実際は軍隊を模した全体主義的な指導が現代に至るまで継承されているのである。しかしながら、体育・スポーツ研究領域において民主的な指導に関する研究は一定の蓄積があるものの、全体主義的な指導を整理する試みは行われてこなかった。なかでも、核心となる問題は、なぜ戦後 70 年近く経った今日でも軍国主義教育を彷彿させる全体主義的な指導の実態が存在しているのかということである。

(2) 先行研究では、指導的支配関係から起こる暴力や体罰のメカニズムを提示した知見も見受けられるが、支配関係の具体的な事例に基づく分析に留まっている。さらに、体罰を生み出す問題は予てから指摘されているが、依然として暴力の一形態を捉える断片的なものに絞られている。民主的な指導と全体主義的な指導といった複雑な共存体制の中で、全体主義的な指導がどのような構成要素を持ち、どのような影響をもたらすかなどのスポーツ活動で起こる理論的前提を含めた包括的な研究は展開されていないのである。

2 . 研究の目的

(1) 本研究では、全体主義理論の形成過程による論点整理を行った上で、今後日本のスポーツ推進を視野に入れながら、全体主義的なスポーツ指導が及ぼす機能と今日的課題について明らかにすることが目的であった。

(2) 具体的には、第一に、これまでの全体主義関連の思想史研究を検討した。とりわけ、全体主義が集団人間形成に対して持つ含意について詳細に検討しているハンナ・アーレント (1906-1975) の著作『全体主義の起原』(1951) を批判的に検討した。そしてそれによって抽出された論点を踏まえ、第二に、スポーツ指導における全体主義の規範理論を民主主義の規範理論も加味しながらスポーツ哲学の立場から明確にし、最後に、全体主義的な指導の機能と今後の展望を示すことを具体的な課題とした。

3 . 研究の方法

(1) 本研究は、スポーツ哲学や政治哲学の分野における文献を対象とした研究方法を採用した。全体主義関連の思想史研究では、国内外の全体主義思想の定式化に取り組む諸研究を対象として、その背景にある価値判断を抽出し検討することにより、その意義と問題点を明らかにしようとした。そのためにまず、国内外で発行された論文、雑誌記事および単行書などの文献の中から、全体主義思想に関連した研究を収集した。特に、本研究はアーレントの全体主義思想を対象として文献研究を行うため、アーレントがどのような理由から全体主義を批判しているのかを検討した。さらに、「権力」や「権威」などのキーワードで検索を行い、関連する議論に見落としていない点がないかどうかを確認した。

(2) 全体主義的なスポーツ指導の総括と今日的課題については、アーレントの思想に基づいて全体主義思想がどのようなものの考え方によって支えられ、正当化され、あるいは批判されているのかという構成要素を明らかにし、日本の全体主義的なスポーツ指導の課題と照らし合わせながら解釈可能性および改善可能性について検討した。

4 . 研究成果

(1) 全体主義的なスポーツ指導の実態

全体主義とは、「20 世紀に現れた社会の全領域を一元的に支配・統制しようとする集権的な政治体制・運動の特徴を表す概念」であり、「個人の尊さを認めない」と説明されている。全体主義概念の起源には、イタリアのファシズム (1922-1945)、ドイツの国民社会主義 (1933-1945)、ロシアのスターリニズム (1920 年代から 1950 年代) などの第一次世界大戦で生まれた三つの歴史的経緯によって形成されている。それぞれの形成過程やイデオロギー、社会的背景は完全に一致するものではないが、「上に立っている者が権威を独占して、下にある人々を思うがままに動かす」という点においては一致している。

2018 年 5 月、アメリカンフットボールの大学対抗試合において、指導者が危険な反則行為の実行を選手に指示するというものであり、大きな騒動となった (以下、日大アメフト部問題)。この問題に対して、選手の自主性やフェアプレーを無視し、勝利を至上・絶対としながら選手を支配する全体主義的なスポーツ指導が存在するのではないかと明示した。高いパフォーマンス

を要求し、全国大会レベルになればなるほど、全体主義的な指導の実態が浮き彫りとなり、その連鎖によって選手生命を失いかねない状況が引き起こされているのである。

(2) 全体主義的スポーツ指導における「無思想性」の存在

前記したように、日大アメフト部の問題は全体主義的な指導が原因ではないかと論じ、さらに、「無思想性」の存在についても言及した。選手の声明文や弁護士らが作成した報告書、論文等を考察した結果、監督・コーチによる権威的な指導によって、選手らは盲目的になり、精神的に追い込まれ、正しい判断をできず、犯罪まがいの危険タックルを起こすまでに至ってしまったことが明らかとなった。これは、ハンナ・アーレント（1906-1975）が示唆する上からの権威によって大衆が思考停止に陥ってしまう、全体主義の現象と類似している。アーレントは、思考停止による「無思想性」の状態に陥ると、破壊的な結末をもたらす可能性があるため、人間は思考することをやめてはならないと訴えた。アーレントの議論にしたがえば、指導者及び選手らが、相手に危険なタックルをすることがどれだけ非人間的で卑劣な行為であるか、さらにその後に何が起きるかということを「わかっていなかった」のである。

(3) 全体主義はどこにでも起こり得る現象

アーレントによれば、全体主義はどこにでも起こり得る現象であることから、全体主義的なスポーツ指導に陥り、破壊的な結果をもたらさぬよう、「そもそも何のためにフットボール（スポーツ）をしているのか」という哲学的思考を持つことの重要性について言及した。

(4) 今後の展望

最終年度は、新型コロナウイルスにより計画通りに研究を進めることができなかった。そのため、1年の研究期間延長を申請した。しかし、その後も新型コロナウイルスが収束することはなく、延長期間が経過した。当初、予定していた研究が進められなかったことは悔やまれるが、本研究で得られた知見を今後の研究にも生かし、教育現場にも落とし込んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 野上 玲子	4. 巻 6
2. 論文標題 オリンピックと全体主義（特集「2020」からオリンピックのいまを考える）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 オリンピックスポーツ文化研究	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Reiko NOGAMI	4. 巻 18
2. 論文標題 Totalitarian Sports Instruction in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Sport and Health Science	6. 最初と最後の頁 215-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/ijshs.202010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 野上 玲子
2. 発表標題 「東京2020大会」を総括する：「オリンピズム」という思想の3本柱と究極目標の平和運動に対応して
3. 学会等名 2021年体育哲学専門領域夏季合宿研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Reiko NOGAMI
2. 発表標題 Sport and Peace: What is Peace in Sport
3. 学会等名 2020 横浜スポーツ学術会議（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野上玲子
2. 発表標題 全体主義的なスポーツ指導論の検討－民主主義から全体主義へ－
3. 学会等名 日本体育・スポーツ哲学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Reiko NOGAMI
2. 発表標題 The philosophical research of totalitarian sports instruction - What is wrong with totalitarian sports instruction? -
3. 学会等名 国際スポーツ哲学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山田明（編）、野上玲子、他11名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社みらい	5. 総ページ数 158
3. 書名 未来を拓くスポーツ社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------